

A君――

私はちかごろ、自分が終戦後に陥った悪習慣の一つである、評論がかつた文章を書きちらす仕事を、もうやめたいとツクツク思っています。

その理由は、まず私の本業は劇作の仕事で、それが評論など書いていると、時間をとられて本業がおろそかになるということです。つぎに評論というものは、だいたい、まず他のことや他の人のことを批評することが中心になる仕事ですが、これが、立派な批評をするとすると、かぎりもなくむずかしい仕事だが、ただ何でもよいから批評でさえあればよいとなれば、世の中でこんなにやさしい仕事はない。どんな馬鹿が、どんなかしこい人のことを、どんなにでも言える。それにくわうるに、現在は「言論の自由」がある。どんな者がどんなことを言つても口が、タテに裂けたり、手が後へまわつたりしない。さてこそ私のようなものが、どんな批評でも発表して評論家あつかいを受けるようなことになる。あさましすぎるのです。

つぎに——これがいちばん大きな理由だが——現在の「言論の自由」は不思議な自由で、それはたしかに自由の一種にはちがいないが、どんな言論を吐いても、それが何のききめもないという条件に支えられた自由であるという点です。大は政治上の問題から小は隣家のラジオの音を小さくしてくれといったようなことに関する言論のすべてが、ほとんどまったく自由で、そしてほとんどまったく無駄です。言つても言つても効果はない。たいがい飽きた。実際上の実効をあげるためには言論というものは道具がちがつていないかという気がする。シャツクリをなすためにペニシリンの注射をしているのではなからうか。とにかく私も飽きた。もつとも評論を書いて原稿料を一枚五千円ももらえれば、私にしてもまだ金には飽きないから、書きつづければ、そんなに稿料を出す雑誌や新聞はないようだ。私のばあいは作品の稿料よりも評論の方がいつでも割が悪い。あれやこれや、私が評論を書きつづけていく必然性みたいなものは、ぜんぜんない。

もつとも、私に評論をもとめる編集者たちの口さきはともかく、腹の中はだいたいまあ「この犬コロの吠え声はちよつと珍だから、色どりに吠えさせてみよう」といったようなところにあるらしいことくらいは私も知っている。だからそんなに大ゲサに考えないで、吠えたくなくなったら吠えてみるという程度でいれば、自他ともに無事でよいとも言えるけれど、いずれにしろ、そんなことでは、ものを言う意欲みたいなものは薄れる。

A君——

しかし君は、農村の中学校の若い教師としてまじめに教育の仕事にいそしみ、しんけんに足を地につけて生きている人です。そして君は私のような者をいくら頼りにしてくれている。その

君が私に手紙をくれて、君自身の仕事や生活の場で生まれつつある苦しみや不安について私の意見を叩いてきている。

それは、主として自由と平和の問題につながるのがあること、なかにも一教育労働者としての、言論の自由の現状と将来についての重要な質問である。それらは君にとつて、一般的なまた抽象的な論議にとどまっていられることがらではない。それらのことを、少なくともそれらの根本的な個所について、多少でも自分としての答えを見つけたさなきがぎり、君は明日から社会科の教壇に立つて、生徒にむかつてどう語つてよいかわからないのであり、PTAの委員にむかつて、どう答えでよいかわからないのであり、そしてそれらについての君の処理いかんによつては、来月君は教職を追われて飢えなければならぬのである。そういう質問であり、そういう質問の出しかたである。

私は君に答えるのが怖い。しかし、私は答えなければならぬ。それは私の名誉ある義務であるとともに、それらの問題が、結局は同時に私自身の問題であるという意味で、私にやりがいのあることだ。

ところでまた、それがそうであればあるほど、私の力ではチャンとした答えを出すことは不可能なことが私にわかっている。まえもつて君にことわつておきたい。頼りになる答えは、たぶんなにひとつ出せないだろう。私にできることは、君に教え指し示すことではなくて、ただもし、私が君の立場に立つてしていると仮定したら、私はたぶんこのように考え、このようになすであろうという想像図を描いてみて、それを君のご参考に供するということにすぎないであろう。

A君――

君がそこ住み、そしてその教職にある中学は、都会からはるかに遠い山村にある。山村農家は概してひじょうに貧しい。君は受持の生徒たちを愛しており、それらを教えみちびく仕事に生きがいを感じており、生徒たちも君を慕っている。君は「生活綴方」運動に熱心で、それが君と生徒たちのつながりの中心になつてゐる。それをとおして君は、生徒たちや彼らの家庭が、いかに酷烈な現実のなかに生きているかを知り、それについて考えたり、生徒とともに苦しんだり、そしてばあいによつて人間としての成長の方へ指導したりすることが出来る。君も貧しい。病身の母と妹をかかえ、君自身も壮健とは言えない。教職を失えば、たちまち君と二人の家族は生活の手段を失う。君は共産主義者ではない。しかし今の社会が今のままでよいとは思つてはいない。なんとか、貧しい人たちがこれほど困らないで暮していける世の中がこなければならぬ。

そう君に思わせるようになったのは、君が教職についてから直接に接触するようになった生徒である農村の子弟の実情と、それをとおした農村の窮状を、まじめに正直に君が考えたためである。君の考えは、だいたい人道主義にもとずいた、おだやかな社会主義的な思想にまとめることができよう。君は教員である職責の限度を越えないように注意しながら、そしてなるべく控えめに、生徒たちにそういうことを話したり、教員同士の集まりでも語り、父兄やPTAとのいろいろの会合のときにも、そういう方向へむかつて話してきた。

ところが、去年あたりから、自分および自分と同じような傾向の三四人の同僚を取りまく空気

がしだいに重苦しくなつてきて、ときどき校長や副校長やPTA役員などから、いままでとは違つた色あいの目で見られるようになり、ばあいによつて、それらの人びとや部落の有力者などから、それとなく忠告されたり、イヤガラセをされることがあるようになった。今年になつてそれはだんだんひどくなり、そのため生徒たちを指導するにも、いろいろの抵抗を感じるようになり、学校にいても村にいても圧迫感がつきまとうようになってきた。

それがこの夏休みのあいだに、かねて「生活綴方」の方でも君の同志である二三人の同僚教員が出しぬけに特審局の役人（？）の訪問を受け、家宅搜索をされ、訊問された。それだけのことも、せまい山村では目だつ事件であり、中学内外の騒ぎになつて、当人たちはそのためたぶん首を切られるだろうと思つており、他でもそう言つている。君はまだそんな目にはあわぬが、いつなんどき同じ目にあわぬともかぎらぬ。その結果もし首にでもなれば、君は教員というやりがいのある職を失い、自分も家族も飢える以外にない。不安でしかたがない。そうかといつて、君は自分が、これまでしてきたことがまちがつていたとは思えない。まして、国法にふれようなどとは絶対に思えない。教員という仕事を持つた人間として当然のことをしてきたまでである。しかし首になるのは怖い。自分だけならまだよいが、母と妹を路頭に迷わせるようなことは自分にはできない。自分はいま、ひじょうに迷つており、苦しい。今までどおりにやつていくべきか、またはいままでのようなやり方をいつさいやめ、何も言わず語らず、「生活綴方」とも絶つて、ただ教科書を生徒に読んで聞かせるだけの教師になるべきか？

「……つまり人間、教師として自然で正しいと思う道を歩くために危険をおかすべきか？ そうだ、という勇敢な声とともに、それは困る、という臆病な声を、僕は同時に自分のなかに聞くの

です。もし危険をおかすのが困るということになれば、僕は明日からものを言わぬ石にならなければならぬのです。」

3

人間として亡びるか？

石になつて残るか？

君は恐ろしい質問をする。君が特審局の役人からおびやかされただけで、それほど強い不安を感じたり、そこまで自分を追いつめて苦しんだりするのは、君の過敏さのせいだと言える。たぶん実際の事態は、君の思っているようなところまでは行かないで止ると私は思う。しかし、君の過敏さはある意味で君の優秀さの証拠だし、それに過敏にしる何にしる君がそう感じていることは事実であり、君はそれについての腹を決めないでは明日からやつていけない。他が何を言おうと、やつぱり君は対決を強いられているのだ。

中央ではいまインテリたちが、自由の領域が急速に奪いとられせばめられていきそうな空気が濃くなつていくことにたいして憂慮している。ことに、情報局のような言論統制機関の設置を示唆しつつある政府の方針のまえで、自由のなかのもつとも大きな自由の一つである、言論の自由を防衛する必要が強く感じられたり論じられたりしている。それは必要なことであり重大なことだから、そうあるべきだ。しかしそれとは別に——いやほんとうは、それと強くつながった形で——というよりも、その基本的な項目の一つとして、地方の現場において、もうすでに、君のば

あいのようなことが無数に起きていることが忘れられてはなるまい。

中央気象台の諸機能は遠い颱風を予知しうるような方向に編成されている。それはしかるべきことで、よいことだ。ところが、時によるとそのような「予知」の諸機能そのものの習慣性が、すでに近づいている颱風さえもまだ距離あるもののように感じさせ、すでに実際に颱風圏内にはいつてしまった人びとの苦しみを見すごしてしまうことがなくはない。少なくとも、それら現場の人びとの苦しみやたたかいの実情とのつながりにおいて考えられたり論じられたりしないばかりがありうる。

近年さかんに論じられた平和の問題や再軍備問題、それから軍事基地やM・S・Aや九十九里浜、内灘などの米軍演習場の問題その他、すべて論じられる方、がよい問題について、概してもつともに近いようなことばかりが言われてきたが——そしてそれら一般の世論を刺激したりまとめたりする役にはたつたのだから、すべて論じられないよりはマシであつたが、しかし評論家や大学教授たちはあまりに多く高級な一般論を展開しすぎて、現地の現場に生きている人たちの身になつて考えて言葉を進めることがあまりに少なかつたために、現地人にはごく僅かしか役にたたなかつた。ばあいによつて、評論家や大学教授たちの打ち上げた花火の煙りのかげで、そうでなければ受けずにすんだ逆の被害を受けた者さえいる。そういう人の実例の一二を私は知つていゝる。彼らはそれらの論者の論に強く共鳴した結果、その論にみちびかれた線に添つて現地人として行動しようとしたが、どうしてよいかまつたくわからなかつた。あせつていろいろやつていゝうちに、とんでもないまちがつた方向へ行つてしまつた。もちろんこれは論者の責任、すくなくとも論者だけの責任ではなくて、当人がいたらないせいからとも言えようが。

さて、私にはまず、右の評論家や大学教授たちのように一般論を展開する学識がない。つぎに、どうまちがつても、君に私の打ち上げる花火の煙りにムセさせたくない。私はたぶん君にとつて有益であろうとすることよりも、無害であることの方を取らざるをえない。私はあくまで一人の平凡な人間として、私が君ならば、私はたぶんこうするだろうことを言うまでだ。そして、それは、たぶん君に、ハッキリした指針をあたええないだろうと思う。

4

いろいろ持つてまわつたような言いかたになつてしまつたが、私の答えは、じつに、情ないほど簡単だ。

私はごく臆病な人間である。そして少しばかりの勇氣らしいものを持つているきりだ。その少しばかりの勇氣でもつて、卑怯でだけはありたくないと思つている。つまりごく平凡な弱い人間だ。そのへんはたぶん君とも、ふつうの日本国民の大部分ともひじょうによく似てはいはしまいかとおもう。

そこで、もし私が君の立場に置かれたとすれば、私も君と同じように不安になるであろう。しかしその不安を自分で誇張したり考えすぎたりして、感傷的になつた疑心暗鬼を描いたりすることはできるだけ避けようにつとめるだろう。そして学校のつとめは一日も怠らぬようにするだろう。「生活綴方」運動は一時ひかえるだろう。もちろん、学校関係や部落関係の各種の集會に出ても、積極的に発言することも一時ひかえるだろう。そして君の同僚たちがどんな理由から役



人の検索を受けたかがハッキリするまで「すべての事態を黙つて冷静に見つめつづけるだろう。もしそのうちに、その事件の全体がハッキリわかり、とがめられたのが直接「生活綴方」そのものでないことが明瞭になつたときには、そしてそれをすることが生徒たちのために良いことだ、との確信が君のうちで崩れていないならば、おだやかな形でそのことを校長や副校長や同僚たちにはかつてみて、彼らの賛成と納得をえたいうえで、徐々にまた「生活綴方」をはじめよう。もしまた、今度の役人の検索が道理にかなつたものでなく、ただ何となく、進歩的な教員たちを圧迫したり脅迫したりしようという当局側の底意にもとずいたものであつたことがわかつたばあいや、なおそれ以上に君たちが同じ動きをつづけるならば、当局側の圧迫は、もつとハッキリした弾圧の形をとり、その結果君が首にされる可能性が見とおされるようになったばあいは、私は残念ながら「生活綴方」をつづけることを断念するだろう。

それは当局の正しさを認めただけではなく、「生活綴方」だけと取りかえつこにするには惜しいものを私が持ちつづけたためである。それは私にとつて第一義的な意義を持ち、私に根本的な喜びをあたえる教育の仕事と、そのことによつて、私が支えている私および母と妹の生活のことである。もちろんこのばあい、十分の勇氣も持っていない、つまり臆病であるという私の現状も、その理由の一つにかぞえあげられるとしても、やむをえない。どう考えてみても、残念ながら私にはそうしかできない。

君が「もうそうなれば僕は石になる以外にないでしょう。」という、その石になるということ、このような状態を指すのかもしれないとも思う。それは誇張だ。石になるというのは、君が人間としても教師としても、すべての活動や発言を禁じられたばあいのことだろう。しかし、も

しかすると、今後あるいは君のような教師たちが「生活綴方」はおろか、あらゆる場面での活動や発言をひじょうに大幅に奪いとられてしまうことは起りうるかもしれない。私も君と同じように、いやもしかすると君以上に悲觀的な見とおしを捨てきれない者だ。よろしい、そういう見とおしまでも計算のなかに入れて言うならば、たしかに、君の形容詞の「石になる」というのも当つていないことはない。

そうだ、石になるでよろしい。私は石になるであろう。しかたがない。私は教師としては教務規定の範囲外のことは何ひとつ教室でしゃべらず、村の住人としては政治や社会や思想にわたるようなことは何ひとつ語らず、それ以外のところでもなるべく沈黙を守るだろう。ただ私は教室では今までよりもさらに熱心に生徒に学科を教えるだろう。算数の時間には二十に二十を加えれば四十だが、二十を二十倍すればどんなに多い数になるかということを正確に教えるだろう。物理化学の時間には、水がなぜに低い方に流れるかの原理や、大岩を打ちくだいて砂にしてみました。自然力の中でいちばん強いものは水であることなどを、しっかりと教えこむだろう。国語の教科書のなかに自由という言葉が出てきたときは、それが人間にとつていちばん大事なものであり「そしてそれを生みだすために絶対に必要なものは平和と平等であることを、一つ一つ実例をあげて説明するであろう。社会科で民主主義ということが出てきたら、それが人びとの生活にとつていかに貴重なものであるか、そしてそれを生みだすためには、各人が自由意志によつて自由に発音するととが絶対に必要であることを、実例をもつて教えるだろう。その他、あらゆる科目のあらゆることについて、私は力をつくして、なるべく正確に「ものの道理」を生徒たちにあたえようとするだろう。私のもっている誠実さのなかのもつとも誠実な部分でそれをするだろう。生

徒たちにたいする公平な愛から出発して、それらをするようにつとめるだろう。

そのつぎに、村人たちと接触するには、いままでよりもなおいつそう柔和で親切な態度をとるようになるだろう。だれを見てもなるべく、その健康と農作物のできふできを問うだけで、理屈めいたことを言わなくなるだろう。病気に苦しんでいる人と貧乏に悩んでいる人と災害になげいている人にたいしては、これまでよりも親切になるだろう。それらを実際的に助けることができなるときには、ホンの一言の言葉やホンの顔の表情だけでも、慰さめ力づけるように心がけるだろう。すべてそれらを宮沢賢治が「雨ニモメゲズ」の詩の中で歌って、いるところに、のつとつてするように心がけるだろう。

そのようにしながら、そのような境遇の自分に許されるかぎりで、自分自身だけでいるときも、生徒たちや母や妹や同僚たちや村人たちとともにいるときも、幸福だと思われることや瞬間を、できるかぎり失わぬように気をつけるだろう。そうすれば、私という「石」も、とにかくやつていけるであろう。

ところが、事態はさらに悪化するかもしれない。石がたんに石であることさえも許されなくなるときが来るかもしれない。すなわち、等差級数と等比級数の違いを教えることもけしからん、水が低い方へ流れることを教えるのもいけない、自由が存在するためには平和と平等が不可欠だなどと言うやつはアカだ、等々々と言われ、それが権力をともなつて強制されるときが来るかもしれない。……そのときには、私はどうするだろう。

石はやつぱりだまつているか？

黙つていないだろう。もはや、やむをえず、石はものを言いはじめるだろう。岩は、たとえ裂

けても、ものを言わないわけにはいかないだろう。もうすでにそのときには、勇氣だの臆病だのが問題になる境ではない。石は石として我慢ならないからだ。押しつぶされて裂けようと裂けまいと、とにかく、もうそうしてはおられないからだ。石は叫ぶだろう。叫ばないわけにいかないゆえに叫ぶだろう。何を叫ぶか？ それは、どうしてもそうしないではいられないですることだから、石がひとりで知っているはずで、思いわずらう要のないことだろう。

「耕して天に至る」、ということがある。山のとつぺんまで耕地になるということだそう。それは国土が完全に耕されたということだから、めでたいことであつて、そして、もうそれ以上に耕す余地が国土に残されていないということだから、亡国のしるしだそうである。国は亡びない方が、いいのかもしれないが、しかしたとえ国は亡びるとしても、人は亡びるわけにいかぬ。生きつづけなければならぬから耕して天にも至る。路傍の石がものを言つたり叫んだりするのも、まさに亡国のしるしであろうが、たとえ国が亡びる、としても人は生きつづける。人は犬になつたり虫けらになつたりするわけにはいかず、人はあくまで人として残るのだから、たとえ一度は石になつたとしても、人間としての最後の証（あかし）が問われるときには、叫ぶまいとしても叫ばないわけ、にはいかぬだろう。たとえ国が亡びるとしても、それは私のセイではない。私を石にしてしまつたり、またその石に叫ばしたりしたところの、不当に私を圧迫した者たちや権力のしたことだ。

叫べば、しかし悪くすると私は踏みつぶされるかもしれない。つまり私は教職を追われてたちまち私と家族は飢えるかもしれない。それは困るし、怖い。でも、仕方がない。

私は僅かばかりの力と勇氣をふるいおこして、私と家族の生活をたてるに足る他の仕事を探し

もとめに出発するだろう。それはたぶん見つかるような気がする。もし見つからなかつたら、そのときはそのときのことだ。ただそのときのために——つまり、もしかすると来るかもしれない最悪のときのために、いまから私は準備するだろう。とは言つても貯金をしたりする余裕は私にはないから、私はただ自分の身体と精神を、いままでよりも強健なものに鍛えておくことを心かけるだろう。たいがいのことにはヘコタレない身心をつくりあげる努力を明日からは始めるだろう。と同時に、自分のような立場と気持にある者が世の中に自分一人しかいないと思うような、感傷的な思いあがりには陥ることをつとめて避け、たいがいの同僚と世間の人びとは、ほとんどすべて自分と向じようなところに立つている事実を、冷静に認めつかんだうえで、それらの同僚や世間の人びととできるだけ調和し協力して、助けあつたり手を握りあつたりする機会を、なるべく取り逃がさぬようにつとめるだろう。たとえば、村の橋をかけかえたり、人手がたらずに収穫作業のおくれた農家を助けたりなどの勤労奉仕に私はいままでよりもセッセと参加するし、それから、学校での職員組合やPTAの下づみの雑用などもいままでよりもマメにやる等々だ。

——だいたい、以上のとおり。その余のことは、仕方がない「天にまかせる」。なさけないけれど、私にはこうしかできないだろう。

どうも頭も悪いようだ。私の書いていることには、前後矛盾しているところがあるかもしれない。また、これまで他の場所で書いたこととアベコベな言いかたもあるのではないかと思う。そういう点があつたら私をやつつけてくれたまえ。じつは私はちかごろ自分の矛盾をそれほど怖れなくなつている。それよりも私は自分が自分にする不正直さや誇張や人間らしくなさの方を、よけいに恐れる。ここで私はただ正直に、そして誇張しないで、そしてできるかぎり人間らしく語

ることだけを心がけた。

5

A君――

ごらんのとおり、私の考えかたは、いつもの私流で「二段がまえ」だ。いつでも最悪の事態を予想して、その予想にたつて腹をきめ準備をしたうえで、しかしその最悪の事態がやつてこないよう、今日今日の最善の努力をしていこうという方式である。これは臆病者の方式だ。臆病者が、自分をおびやかしてくる不安の下で窒息しないで、そしてエネルギーを保持していくためにはこれしかないように思われる。

どうせ私に十分な勇氣やエネルギーの持ちあわせはない。最悪の最後の瞬間に「否」と私は言わなければならぬが、それを勇氣からはたぶん言えない。客観的な条件から、ノツピキならず追いつめられて追いつめられて、もうそれ以上は逃げられないことを骨身にこたえて知つたとき、理知と本能の二つのものが、あれやこれやと別々の二つのものとして、自分のうちで働いていることを許されなくなつて、理知が本能になり本能が理知になつてしまつたところから、ただ一つの声をあげなければならなくなつたとき、そして他にたいする倫理や誇りからではなくて、自分が自分にたいして持ちうる人間としての最小の最後の自覚――つまり自分が犬でもなければ虫でもなくて人間であるという自覚にたたざるをえなくなつたとき、私はかろうじてそう言えるだろうし、そうできるだろう。そのときにはじめて私はエネルギーッシュになりうる。

ただもちろん、追いつめられることは怖い。そういう形で勇氣あるもののように、またエネルギーギッシュらしいように自分ができるだけ避けたい。イヤなことだ。

それには客観的条件が、それほど自分を追いつめないように、客観的条件そのものを取りのぞいたり、緩和したりするための社会、一般の動きに、できるかぎり協力参加する。それは可能であるか？ 可能である。それはいうまでもなく、このばあいはまず「政治」に参加することであるが、ただたんにせまい意味の政治参加だけでなく、自分の全生活をもつて深く重く協力参加することを私に要求する。

「今日々々の最善の努力」というのが、それにあたる。私はそれをする。一生けんめいに、それをするにいそしむ。ただ、それさえしていれば、最悪の事態はこないだろうなどは思わないで、それをする。

私が君ならば、私は、ふたたび日本を反動的なところへ持つていかないために働いている人びとに、私に許されるかぎりの力で協力し参加するということだ。ただし、そんな人たちのなかで、どういう意味でも全体主義的態勢の方へわれわれを連れていこうとしている人びとは協力しない。それは、全体主義者たちの持つている自由平等・民主主義などについての考えが、私のそれと違うからである。この点については、もつとくわしく書かなければ、君には十分にわかつてもらえないかもしれないが、今日のところはこれぐらいにして、それについてはまたそのうちに書こう。

A君――

何はともあれ、君のような誠実な人が、教師をやめてほしくないと私はせつに思う。教育のこ

とはいまの日本でいちばん大事だからだ。私の手紙がホンの少しでも君の参考になることができれば、私はうれしい。

(一九五三・十二)



底本.. 「日本及び日本人——抵抗のよりどころは何か」 光文社

1954 (昭和 29) 年 4 月 25 日初版発行

初出.. 「中央公論」

1953 (昭和 28) 年 12 月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成 23) 年 3 月 11 日